

一八八二年四月二日(日)

聖ラーマクリシユナと信者、寺院よりプランクリシユナの家へ

タクル、聖ラーマクリシユナは今日、カルカッタにおいてに於いて。プランクリシユナ・ムコパツダエ氏所有のシャームプクルの邸の二階の広間で信者たちと共に坐つておられる。今しがた、皆といつしよに食事をなさつたところである。今日はキリスト暦一八八二年四月二日、日曜日。チョイトロ月二十一日、チョイトロ白分十四日目。時間は午後一時から二時の間。大佐もこの町内に住んでいる。(大佐—ヴィシユワナート大佐)

タクルの御希望でこの邸を訪問した後、大佐の家へ行つて彼に会つて、睡蓮莊(コモロクテイ)という名の屋敷へケーシャブ・センに会いに行かれることになつてゐる。プランクリシユナも広間にいる。ラーム、マノモハン、ケダル、スレンドラ、ギリンドラ(スレンドラの兄弟)、ラカール、バララーム、校長などの信者たちが同席してゐる。

町内の旦那方やそのほか大ぜいの招待客たちがいて、タクルがどんなことを話されるのか聞くために、皆、熱心に待ちかまえてゐる。

タクルが話されたことは神とその富についてである。この世界は神の所有物もちものである。

「けれども、所有物だけを見てあとのことは皆、忘れてしまう。持ち物がどなたのものだか探そうとしない。みな女と金にうつつを抜かしているが、苦しみや不安なことがたくさんあるよ。世間というものはヴィシヤラクシ河の深淵のようなもので、舟がいったん落ち込んだら最後、もう助からない。いばらの茂みのようなもので、一つ抜け出したと思えば、すぐ又別のに巻き込まれる。迷路に一度踏み込んだら、抜け出すことはたいそう難しい。世間で暮らしていると、男は丸焼きになって焼けてしまうのだ」

一人の信者「何か助かる方法みちは？」

「方法サードは——真人との交流と祈り」

聖ラーマクリシュナ「その方法はね——真人サードとの交流、つまり聖者や霊的な人、信心深い人たちと交わることだ。それから祈り。医者のところへ行かなくては病気はよくなる。よい交流も、一日やそこらじゃだめだよ。いつも付き合っていることが必要なのだ。病気は慢性になっていくからね。それに、医者サードの傍にいないと脈の押さえ方が覚えられないから、いつも一緒にいて廻るのだ。そうしているうちに、どんなのが風邪引きの脈か、どんなのが肝臓病の脈かわかってくる」

信者「聖者や信心深い人と交流して、どんな役に立つのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「神様を慕うようになる。あの御方が好きになる。熱心にならないと何事もできない。霊的な人々と付き合っているうちに、命がけて神が恋しくなってくる。家のなかで誰かが病

気にかかる、絶えず治りたい、治したいと心が苛立つ。それで病人はよくなるのだ。それから、もし誰か失業すると、その人は会社から会社へと朝から晩まで歩き廻って、居ても立ってもいられない気持ちになる——ちよūdそんな具合にね。どこかの会社で、あいにく仕事の空きはないよ、と言われると又、次の日出かけて行って、今日は何か仕事の空きがありますか？ と聞くだろう。

も一つ方法がある——熱心に祈ることだ。あの御方は自分と一番親しい身近な方だから、何の遠慮もいらん、こう言うのだ。『あなたはどんなものか見せてくれ——見せてくれるべきだ——あなたが私を創ったのはどういうわけだ？』と。前にシーク教の連中が、神は慈悲深い、と言うから、わたしは言つてやったものだよ。『どうして慈悲深いなぞと言うのかね？ あの御方は我々をお創りになつたのだ。我々の面倒をみてくれたつて何の不思議があるものか！ 母さんや父さんが自分たちの子供の世話をするのが、慈悲だともいうのかい？ それが当り前なだから圧力をかけて要求しろ』あの御方は自分の母親、自分の父親なのだ！ 息子が断食してまで要求すれば、両親は三年繰り上げても財産の分け前をくれてやる。また子供が金を欲しがつて、しつこくせがんで、『母さん！ 後生だから、僕に銅貨二枚ちよūdだよ』と言えば、母親はあまりの熱心さに折れて、金をくれてやるものだ。靈的な人と交流すると、もう一ついいことがある。善悪の見分けた。實在、永遠のもの、それが即ち神。非實在は即ち無常變化するもの。非實在の道に心が迷いこんでいまいかどうか判断しなければいけない。象が隣の家のバナナの木を食べようとして鼻をのばしたら、すぐ象使いは鉄棒でたたく。近所の人「先生、罪な思ひはどうして起こるのでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「あの御方の世界には、あらゆる種類のものがある。正直で信心深い人もあの御方はお創りになったし、ならず者もお創りになった。善い心や性格もあの御方が下すったのだし、悪い心や性格もあのお方が下すったのだ」

〔罪の責任と行為の果報〕

近所の人「では、罪なことをしても、私どもに責任がないことになります」

聖ラーマクリシュナ「神の法則はこうだよ。罪な行いをすればその実がなる。コショウを舐めると舌がヒリヒリするだろう？ シェジョ(訳註1)さんは若い時分、いろんなことをしたので、死ぬときにいろんな病気がでてきた。若いときには、どうもこのことがわからないものだよ。カーリー神殿で食事を料理するのに沢山の薪がおいてある。湿った木は、はじめは勢いよく燃えるから、中に水気があることがわからない。木がだいぶ燃えてきたあとで水が隠れた場所からしみ出てきて、ブスツ、ブスツといひだしてかまどの火を消してしまふ。だから情欲とか怒り、貪り心むさぼ——こういうものに気をつけなくてはいけない。見なさい、ハヌマーンは怒りのあまりランカー(セイロン島)を焼き払おうとして火をつけたあと、シーターがアショーカーの森にいたことを思い出してガタガタ震え出した。シーター

(訳註1) シェジョさん——シェジョは三番目のという意味で、ラースマニ家の三女、カルナーマイーの婿むこマトゥール氏を指す。カルナーマイーの死後、四女のジャガダンバの婿むことなった。

に何事もなければいいがと心配のあまり——」(訳註)

近所の人「それでは、なぜ神様は悪人をお創りになつたのですか？」

聖ラーマクリシユナ「あの御方のご希望、あの御方の遊戯だ。あの御方のマーマー(現象、幻象)にはグイデイヤグイデイヤ、クワイデイヤクワイデイヤ、知チも、無知ムチもある。暗闇くらやみの必要もあるよ。暗闇があるからこそ、光は一層明るく頼もしく見えるのだ。色情、怒り、貪欲などがいけないのは確かだが、それならなぜ、あの御方は下すつたのだらうね？ それは、力強い、すぐれた人をお創りになるためだ。五官の誘惑に打ち勝てば、人は偉大になれる。感覚の迷いに勝つた人にとって、何かできないことがあるかい？ あの御方のお恵みで、神を掴むことだってできるのだ。それに見ろ、どこもかしこも色欲を通じて、あの御方の創造の遊びが続けられているのだ。

悪人だつてちゃんと使い道があるよ。あるところの領地で、住民どもが好き勝手なことをして始末におえなくなつた。そのとき領主は、ゴロク・チヨウドリーを取り締りに派遣した。彼の名をきいて、住民どもは震え上がった——残忍酷薄な監督官だつたからね。どれも皆、必要なのだ。シーターが言つた。『ラーマ様！ アヨーデイヤの都市の家がみな立派な邸宅だつたら、どんなにいいでしょうね。壊れかけたような家や古びたのが、随分目につきますわ』ラーマはおっしゃつたね。『シーター！ 全部の家がいつもきれいになつていたら、建築屋いしやは何をすればいいのだ？』(一同笑う)

神はあらゆる種類のものをお創りになつた。良い草木も、毒のある草木も、何の役にも立たない雑草もお創りになつたのだ。けものの中になつて、いいのも悪いのもある——虎も、ライオンも、ヘビ

も、みんないる」

〔世間においても神は覚れる、すべての人が自由ゲグツになれる〕

近所の人「先生、普通の社会生活をしていまして、神を覚ることが出来るものでしょうか？」

聖ラーマクリシュナ「もちろん出来るとも、だが、さつきから言っているように、霊的な人と交流して、そして絶えず祈っていることだ。あの御方を求めて泣くことだ。心の汚れを洗いおとせば、あの御方に会える。心は泥にまみれた鉄針のようなもので——神様は磁石だ。泥を落とさなければ、磁石に吸いつくことはできない。泣いて泣いて針についた泥を洗い落とすことだ。針の泥というのはそれ、色欲、貪欲、怒りといったよくない性質、世俗の欲に引かれる気持ちのことだ。こうした泥がきれいになったとたん、針は磁石に引きつけられる。つまり神様にお会いできるわけだよ。心が純粹清浄になれば、あの御方が掴める。熱があるときは体に沢山水分があり過ぎるから、それをとってからでなければ、あの御方が掴めない。この世で暮らしていて、できないことはないだろう？」と  
 というわけで、霊的な人たちと交わり、泣いて、祈って、時々独りで坐る。すこしは囲い柵をしておか

（訳註2）ラーマーヤナからの引用——羅刹王ラーヴァナに捕らえられたシーターの救出のためにランカーに渡ったハヌマーンだったが、ラーヴァナに捕まってしまふ。ラーヴァナはハヌマーンの猿としての誇りである尾に火を付けてランカーの街を引き回した。しかし、ハヌマーンは鎖を解いて脱出し、尾に火が付いたまま、家から家、宮殿から宮殿へと飛び移ったので、ランカーの街は燃え落ちてしまった。——「ラーマーヤナ 第五卷第十八章」——

くては——道つぱたに生えている木は、すぐ山羊や牛に食べられてしまふからね」

近所の人「念を押すようでございますが、それでは、社会人として生活していても悟ることができ  
るのですかね？」

聖ラーマクリシユナ「誰でも皆、解脱できるのだ。だが靈グの教師ルの教えに従ってついていくことだ。曲がりくねった道に踏み込んだら、苦しいからね。そして、解脱するのが随分と遅くなる。この生涯ではできないかも知れない。何度も何度も生まれ変わったあとで、やっと成功するだろうよ。ジャンナカ王のような人たちは、世間並みの仕事もなすった。神様に頭をあずけて、用事をしなすったものだよ。ちようど踊り子が頭に壺をのつけてダンスするようにさ。ほら、西部の女たちを見たことがないかね？ 頭に水ガメをのせて、笑ったりしゃべったりしながら歩いていくだろう」

近所の人「靈ツの教師ルの教えということをおっしゃいましたが、グルはどうすれば見つかるのでござ  
いますか？」

聖ラーマクリシユナ「誰でもがグルになれるわけではない。しっかりとて剛気な木は、自分も水に浮いているが、大ぜいの動物を乗せて運ぶこともできる。貧弱な木の上に乗つかれば、木も沈んでしまふし、乗ったものも沈んでしまふ。だから神様は、その時代、その時代に、人びとを導くために、自らグルの姿になってこの世に現れ給うのだよ。サツチターナサツチターナンダ（実在智慧・歡喜）こそがグルだ。智慧とは何を指さすか？ そして、ワタシといっているものは何者なのかね？ 神のみが行動者で、ほかはすべて何でもない（行動者ではない）。これを智慧というのだ。ワタシは何の行動もしない。あ

の御方の手に使われる道具だ。だからわたしは、いつも言うのさ。『大実母よ、あなたが使い手、わたしは道具。あなたが住人でわたしは部屋。わたしは車でああなたが運転手。行かせる通りにわたしは行く。させる通りにわたしはする。言わせる通りにわたしは言う。無我<sup>ナハン</sup>、無我<sup>ナハン</sup>、あなた<sup>トッフ</sup>、あなた<sup>トッフ</sup>』

### 睡蓮荘で聖ラーマクリシュナとケーシヤブ・セン氏

聖ラーマクリシュナは、大佐の家からケーシヤブ・セン氏所有の睡蓮荘という家に行かれた。ラーム、マノモハン、スレンドラ、校長等、大ぜいの信者たちがお供をした。みな、二階の広間<sup>ホイル</sup>に上がった。プラタプ氏、トライローキヤ氏等、ブラフマ協会の会員たちも来ていた。

タクールは、ケーシヤブさんが好きである。ベルガリヤの荘園に弟子と共に彼が礼祭に来ていた。即ち、キリスト暦一八七五年マーグ月（一二月）のヒンドゥー教の大祭の後、数日間のうち、タクールは一日そこへ行かれて彼とお会いになったのである。甥のフリダイがお供をしていた。ベルガリヤのその別荘で彼に話された。

「あなたのシツポはとれた——つまり、あなたはすべてを捨てて世間の外にも住めるし、また、世間のなかでも暮らしていける。オタマジヤクシがシツポをおとせば、水の中でも住めるし、岸が上がっても生きていけるのだ」

<sup>ドフキエシヨル</sup>  
南神での後、睡蓮荘、ブラフマ協会などの場所で、何回もタクールは歓談して彼に教訓を与えられた。「いろいろな道を通って、いろいろな宗教の中を通って神をつかむことができるのだ。時々、独り静

かな処で祈りつづけて、しっかりと信仰を身につけてから世間で暮らしなさい。ジャナカ王はブラフマン智を悟つてから、普通の生活をした。無我夢中になつてあの方を泣いて呼べば会つて下さる。あなたがしているように、形のない神に祈るといふのも大へん結構なことだ。ブラフマン智に到達すれば、ほんとうに何が正しいのかわかるようになるのだ。神のみ実在で、ほかは皆、非実在。ブラフマンのみ真実で、世界は錯覚。永遠の宗教ヒンドゥー教では、有形の神も無形の神も両方とも認めて崇めてゐる。さまざまな作法で宇宙唯一神を拝んでいるのだ。静、奉仕の精神、友情、思いやり、やさしく美しく。吹奏団の人たちは、一人が決まつた音を長く出していただけだ——もつとも、笛は七つの穴があるけれども。も一人は七つの穴をつかつて色々な音色を出している。

あなた方は形のある神(人格神)を認めていないが、それでも別に差し支へはない。無相の実在(無形の神)をしっかりと信じていればよろしい。だが、人格神を信ずる人たちの気持ちも少しは汲みとりなさい。お母ちゃんとのあの御方を呼び求めれば、信仰と聖愛のころはだんだん強くなつていく。そのときと場合によつて、奉仕の気持ちと、友情と、思いやりと、やさしく美しく行動し、何の願ひこともなく、ただ神を愛することが最もよいことである。これを無条件の信仰というのだ。金銭、名誉名声なんかを欲しがらな。ただあの御方の蓮華の御足を仰げ。ヴェーダ、プラーナ、タントラなどには、ひとりの神様の話と、またあの御方の遊戯の話もある。智識についても、信仰についても書いてある。世間では金持ちの女中のような気持ちで暮らせ。女中は家事一切をして働いているが、心は郷里のことでいっぱいだ。主人の子供たちを育てて、私のハーリ、私のラームなんて口では言っ

ているが、この子供たちは自分のものでないことをよく心得ている。独り静かなところで祈ることはたいそういいことで、必ずあの御方のお恵みがあるよ。ジャナカ王は、独り人里離れてどれほど修行なすったことか。そうしてから世間へ出て、無執着の生活をなすったのだ。

あなた方は皆を導くために講演をするそうだが、神に触れ、神を見てから講演や説教すればほんとうに人のためになる。あの御方のお指図がないうちに人に教えるのは、何のためにもならないよ。神様をつかまなければ、あの御方のお指図は受けられない。神をつかんだ人には特徴しるしがある。子供のようになつたり、感覚のない無生物のよう見えたり、気狂いのよう見えたり、食屍鬼ビシトオヤのようになつたりする——シユカデーヴァたちのようにね。チャイタニヤチャイタニヤ様も子供のようになつたり、時には気狂いのようになつて踊られたものだ。笑つたり、泣いたり、踊り歌つた。プリーにおられたときは、長いこと感覚がなくなつて三昧に入りつづけておられたものだ」

〔ケーシャブ氏のヒンドゥー教に対する尊崇〕

このようにして方々の場所で、ケーシャブ・チャンドラ・セン氏に、聖ラーマクリシュナは歓談をなさつたり、種になる教訓を与えられたのである。ベルガリヤの別荘で最初に会つてから、ケーシャブは一八七五年三月二十八日、日曜日、『ミラー』（原註）紙上しんがにこう書いてある。

数日前、私は南神村トッキネーシヨルの大覚者バガマハンサラーマクリシュナと、ベルガリヤの別荘に於いて会見した。その人

格の奥行きの深さ、洞察力、そして子供のような無邪気な態度に、われわれは完全に魅了されたのである。静かな落ち着きのうちに、えも言われぬ優しさと朗らかさをたたえ、よく観察すると、絶え間なくヨーガの状態にあられるようであった。

今、われわれが感じていることは次の如くである。——即ち、ヒンドゥー教の底知れぬ深い領域を探究するならば、如何ばかりの美と真理と善とを発見できることであろうか、と。そうでなければ、この大覚者の如く、神そのものを彷彿とさせる偉大なヨーギーが現れるはずがない。

一八七六年一月、再びマーズ月祭に行き、彼はタウン・ホール(原典註2)で講演した。演題は「我等の信仰と体験」で、そこでも、ヒンドゥー教の美しい物語を話した。

もし、古代のヴェエダ時代のアーリア民族に、無相の、あるいは形なき大霊についての深遠な真理を我々に教えてくれたという名誉を与えるならば、同じく、心からなる尊敬を、のちのプラナー時代のヒンディー人たちに捧げよう。なぜならば、後者はわれわれに、最大限の広さと深さをもって宗教的情感というものを教えてくれたからである。

ヴェエダ、およびヴェエダーンタの日々において、インドはすべてヨーガの時代であった。また、プラナーの日々においては、インドはすべて信仰(バクティ)の時代であった。宗教の持つ最高最良の情感は、ある特定の神格の守護のもとに培(つちか)われた。

(原典註一) We met not long ago Paramahansa of Dakshineswar, and were charmed by the depth, penetration and simplicity of his spirit. The never ceasing metaphors and analogies in which he indulged are most of them as apt as they are beautiful. The characteristics of his mind are very opposite to those of Pandit Dayananda Saraswati, the former being too gentle, tender and contemplative, as the latter is sturdy, masculine and polemical. — Indian Mirror, 28th March, 1875 (数日前、私は南神村の大覚者ラーマクリシュナと、ベルガリヤの別荘に於いて会見した。その人格の奥行きの深さ、洞察力、そして子供のような無邪気な態度に、われわれは完全に魅了されたのである。このお方が興ずる尽きない寓話や例え話のほとんどが、適切であると同時にまた美しいのである。そのお心の特徴と云うなら、学者ダヤーナンダ・サラスワティーのそれとは正反対である。前者がえも言われぬ優しさ、甘美さ、瞑想的であるとするならば、後者は屈強にして論争好き、男性的であると云えよう。——一八七五年三月二十八日付けインディアン・ミラー)

Hinduism must have in it a deep source of beauty, truth and goodness to inspire such men as these. — Sunday Mirror, 28th March, 1875 (インドゥー教は、こころした人々を鼓舞するための美と真理と善の深遠なる源を有しているに違いないのである。——一八七五年三月二十八日付けサンデー・ミラー)

(補足訳註) マヘンドラ・グプタは『コタムリト』の本文中にはミラー紙に載った英文の記事をベンガル語に翻訳して記載しているが、英文をそのままベンガル語に翻訳していないことがわかる。

(原典註二) If the ancient Vedic Aryan is gratefully honoured today for having taught us the deep truth of the Nirakar, or the bodiless Spirit, the same homage is due to the later Puranic Hindu for having taught us religious feelings in all their breadth and depth.

In the days of the Vedas and the Vedanta, India was all Communion (Yoga). In the days of the Puranas, India was all emotion (Bhakti). The highest and best feelings of religion have been cultivated under the guardianship of specific divinities.

——Our Faith and Experiences Lectures delivered in January, 1876

——一八七六年一月の講演「我等の信仰と体験」より——（英文より）

聖ラーマクリシュナは彼をたいそう好いておいでになり、また一方、ケーシャブもタクルを心から敬愛していた。ほとんど毎年、ブラフマ協会の記念祭の時、また、そのほか様々の機会にケーシャブは南神ドゥッキネーショルに出かけて行つたし、またタクルを睡蓮荘にご案内したりした。時々一人で、睡蓮荘の二階にある礼拝室に、この上なく親密の情とあふれるばかりの信愛の情とをもって行つたものだ。一人で、思う存分神に祈りを捧げ、歓喜にむせんだりしていた。

一八七九年、バッドロ月（八月九月）の祭りのころ、再びケーシャブは聖ラーマクリシュナを招待して、ベルガリヤの人里離れた一軒家（隠者の庵）にお連れした。九月十五日、月曜日、バッドロ月の三十一日のことである。また、九月二十一日、睡蓮荘で祭祀を催した際にも御招待した。この時には聖ラーマクリシュナは三昧サマーディに入られ、ブラフマ協会の会員たちといっしょのところを写真にとらせて下さった。タクルは直立した姿勢で三昧に入っておられるところである。フリダイがお体を支えている。十月の二十二日、カルティク月（十一月）の六日、マハーシュタミー八日目と九日目にケーシャブは南神ドゥッキネーショルに行つて、タクルにお会いした。（訳註、マハーシュタミー——秋のドウルガーブー ज्याのお祭りの一つ）

一八七九年十月二十九日、水曜日、カルティク月十三日、ベンガル暦二二八六年、コジャガル・プー  
ルニマ、夜一時ころ、ケーシャブはまた会員たちと聖ラーマクリシュナにお会いするため南神ドゥッキネーショルを訪ねた。蒸気船といっしょに一双の屋形舟、六双のボート、二双の小舟に分乗して、およそ八十人の会

員を連れてきた。旗、花、法螺貝、シンバル、長太鼓コウコなどを持参して——。フリダイが迎えに行つて、ケーシヤブを蒸気船から連れてきた——歌をうたいながら、「聖なるガンジスの岸辺にて、ハリの名呼ぶは何人ぞ、聖愛あひにあふれて慈悲深き、ニタイ来たるとわれ知りぬ！」ブラフマ協会の会員たちも五聖樹パンチャパテイの杜から聖歌をうたいながらケーシヤブと入り来はじめた。「サツチダーナンドの御像おんかたち、美と歎びに満ち充ちて！」かれらに取り囲まれながら、タクールはしばしば三昧に入られる。この日が暮れると、バンダガートで満月のこうこうたる光にケーシヤブは祭礼を捧げた。(訳註、コジャガル・ブルーニマ——アツシン月の満月の日にラクシュミー女神に祈りを捧げると、女神が祈りの場に現れ、願いを叶えてくれるとされる日。太陰暦によるベンガル暦では一八七九年十月二十九日はアツシン月となる)

祭礼の後、タクールは、「みんなで、ムブラフマン、アトマン、バガヴァンム、ムブラフマン、マールヤ、ジーヴァ、ジャガツト(世界)、ムバーガヴァタ(聖典)、バクト(信者)、バガヴァン(神)と唱えろ」と言われた。ケーシヤブたちブラフマ協会の会員たちは、その月光ふりそそぐガンジスの岸辺で、聖ラーマクリシュナといっしょに皆で声をそろえて、そのマントラを信愛バクティをこめて唱えはじめた。聖ラーマクリシュナは次に、「グル、クリシュナ、ヴァイシュナヴァ(ヴィシュヌ神の信者)」と唱えるようにとおっしゃる。そのときケーシヤブはうれしそうに笑いながら言った。「先生、そこまではちよつと……。グル、クリシュナ、ヴァイシュナヴァなどと私どもが言いますと、世間の人たちは笑いますでしょうよ。ブラフマ協会のくせに、あんなありきたりのことを言う！と云つて」聖ラーマクリシュナも笑い出しながらおっしゃる。「結構、あなた方にとつて差し支えない文句だけを唱えたらいい」

数日の後、(一八七九年)十一月十三日、カルティク月二十八日、カーリー・ブージャの後、ラーム、マノモハン、ゴパールらのグループが南神ドフキネーシヨルにきて、聖ラーマクリシュナに初めてお目にかかった。

キリスト暦一八八〇年暑い盛りのころ、ラームとマノモハンは睡蓮荘にケーシャブを訪ねていった。彼等は、ケーシャブ氏がタクルをどのように評価しているかを、ぜひとも知りたかったのである。彼等が質問すると、ケーシャブ氏は次のように答えた。「南神ドフキネーシヨルの大覚者は尋常な方ではありませんね。いまの時代、世界中でこれほどの大人物はいないと思います。こんなに美しく、こんなに特殊な人格に対しては、できるだけ注意深くしていねいにしなくてはと思います。いいかげんな気持ちでお扱いしては、おそらくお体が保たないのではないでしょう。ちょうど美しく貴重な品物をガラスのケースに入れて保存しておくように、です。」(原典註3)

この後何日か経って、一八八一年マーズ月のお祭のとき、一月、ケーシャブは聖ラーマクリシュナにお会いするため南神ドフキネーシヨルに行った。そのときには、ラーム、マノモハン、ジャイゴパール・センなど多数が同行した。

シヤカ暦一八〇三年、ベンガル暦一二八八年スラボン月一日の金曜日、キリスト暦一八八一年七月十五日、ケーシャブは又、聖ラーマクリシュナを南神ドフキネーシヨルから汽船でお連れした。

一八八一年十一月にマノモハンの家へタクルが来て下すったとき祭典があつて、そのときもケーシャブは祭典に呼ばれて同席した。トライローキヤ氏たちが歌った。

一八八一年十二月、ラジェンドラ・ミトラの家へ聖ラーマクリシュナは招待されて行かれた。ケー

シヤブ氏も行った。ターンタニヤのベチエ・チャタルジー通りにその家はあった。ラジエンドラはラムとマノモハンの叔父(母の姉妹の夫)にあたる方である。ラム、マノモハン、ブラフマ協会の会員のラジヤモハン、ラジエンドラはケーシヤブにも知らせて招待したのであった。

ケーシヤブに知らせが行ったとき、彼は弟アゴルナート・センの喪に服していた。説教師であった弟アゴルは、オグロハヨン月二十四日、十二月八日の木曜日にラクノウ市で亡くなったのである。だから、誰もがケーシヤブは招待に応じられない、と推察していた。ケーシヤブは知らせを受けると言ったものだ。「何だつて! 大覚者先生ブラハマチャリヤがおいでになるといふのに私が行かないでいられるか。勿論行く。喪に服しているので、食事は別のところで食べるようにしよう」(訳註——喪に服している間は、血縁の者は食べられる食事が限られているので料理を別にしなくてはならない)

(原典註3) ジョイスト月一日、一八七五年五月十四日、聖ラーマクリシュナはまたベルガリヤの別荘に行かれた。バーラタ・アーシユラマ・リベルの訴訟問題が終わった一八七五年四月三十日、ベンガル暦二二八二年ポイシヤク月十八日のこと、ケーシヤブはその庭園にそのときまで滞在していた。

一八八〇年、聖ラーマクリシュナはカマールブクルに八カ月滞在された。一八八〇年三月三日、水曜日、ファルダン月二十一日から十月十日アツシン月二十五日までのこと。その時間、シホル、シヤームバザール、コヤバラ等の場所で讚神歌を楽しんだ。お帰りのとき、コトロプールのバッドロ家で祭りの第七日目の儀式をご覧になった。通り道でケーシヤブがよこしたブラフマ協会の会員たちに会われた。ケーシヤブはこのところ数ヶ月もタクールにお目にかからないので、非常に会いたがっていた。

マノモハンの母上、シャーマスンタリー・デーヴィーはとても信仰心の深い方で、この日食事のとき、タクルのお給仕をなさった。ラームは食事のときは立ったままであった。ラジェンドラの家に聖ラーマクリシュナが招待されたその日の午後、スレンドラはタクルをチャイナバザールにお連れし、そこで写真を撮らせていただいた。タクルは直立して入三昧のお姿である。

祭りの日、マヘンドラ・ゴースワミーがバーガヴァタ(プラーナの一部)を朗読した。

一八八二年一月のマーグ月祭のとき、シムリヤのブラフマ協会の祭典があつた。ジュニヤーナ・チヨウドリーの家において、屋内の広間と中庭で拝礼と讚神歌合唱があつた。聖ラーマクリシュナとケーシャブは招待をうけて出席しておられた。この場所で、ナレンドラの歌をタクルは初めてお聞きになり、彼に南神に来るようにとおっしゃったのである。

キリスト暦一八八二年二月二十三日、ファルグン月十二日、木曜日、ケーシャブは聖ラーマクリシュナを南神に信者たちと共にまたお会いするためお訪ねした。そのときはジョセフ・クックとアメリカ人神父ミス・ピゴットが同行した。ブラフマ協会の会員たちもいっしょに、ケーシャブはタクルを汽船にお乗せした。英国人クックは聖ラーマクリシュナの三昧状態を拝見することができた。ナゲンドラ氏がこの船に同乗していた。この人の口からいるんなことをすべて聞いて、校長は三日もたぬうちに南神へいき、聖ラーマクリシュナにはじめてお会いしたのである。

こうしたことがあって二ヶ月後の四月に、聖ラーマクリシュナは睡蓮荘にケーシャブに会いに行かれた。これまでのタクルとケーシャブとの交渉を説明した次第である。

以上

〔聖ラーマクリシュナのケーシャブに対する愛情——世界の母のもとに青ココナッツと砂糖の約束〕

今日は睡蓮荘の応接間で、タクール、聖ラーマクリシュナは信者たちと共に坐っておられる。一八八二年四月二日、ベンガル暦二二八八年チョイトロ月二十一日、日曜日、午後五時ころである。ケーシャブが奥の部屋にいたところへこの来訪の知らせがあった。彼は外出着を着て客間に現れ、あいさつをした。彼の会員仲間であるカーリーナート・ボースが病氣なので、見舞いに出かけようとしたのである。タクールが来訪されたので、ケーシャブは外出をとりやめた。タクールは言われた。「お前は仕事か沢山ある上に新聞まで書かなければならない。あそこ（ドッネーシヨル）に来るひまがないだろうから、わたしがお前に会いにやっ来てんだよ。お前が病氣だときいて、青ココナッツと砂糖を供えて、大実母（ママ）にこう言っておねがいました。「マー、ケーシャブがもしどうにかなったら、カルカタへ行つたとき、誰と話をしたらいいんですか」って」

プラタブ氏らブラフマ協会の会員たちと聖ラーマクリシュナは四方山（よもやま）の話をされた。そばに校長が坐っているのを見ながら、あのお方はケーシャブにこう言われた。「この人に、なぜもつとあそこ（ドッネーシヨル）（南神）)においてなさらんのかと、サア、聞いてみておくれよ。この人は、妻や子供のことなど気にかけておりません！　なんてことをおっしゃったよ」校長は約一ヶ月余り前からタクールのもとに通うようになったのであるが、ここしばらく行くのがおかれていたので、タクールはこのような言葉をお口にされたのだ。そう言えばタクールは、来るのが遅れる場合は手紙をよこせ、と言って下さったのである。

ブラフマ協会の会員たちは、サマーデヤイー氏をタクールに紹介して、「このかたは学者で、ヴェーダやその他の聖典に精通しておられます」と申し上げた。タクールは言われた――

「そうかい。この人の目から、この人の中にあるものが見えてくる。ちょうどガラス戸越しに部屋の中の品物が見えるようだ」

トライローキヤ氏が歌をうたいはじめた。歌の間に夕方のランプがともされたが、そのまま歌声は流れつづけた。歌をきかれているうち、タクールは突然直立されて――大実母の名をとえながら三昧に入られた。すこし意識が戻られると、ご自身で踊りながら讚神歌をうたわれるのであった。

われ飲むはこの世の酒ならぬ

永遠に芳ばし神の甘露酒

大実母カーリーに栄えあれと

身も心も喜びに酔いしれぬ

わが師のたまわりし教えに

わが熱情をそそぎて醸す

智の酒の燃ゆる壺より

われ飲んで心酔いたり

根本なる真言はカーリーの御名

唱え念ずれば六根清浄なり

唱うれば身も心も清く

神の甘露酒飲みて生命の

四つの実を獲れとブラサードは言えり

四つの実——正義、富、愛情、解脱

ケーシャブ氏の方を、タクールは親愛の情にあふれるばかりのまなざしで眺めておられた。まるでご自分の家族の一部でもあるかのように——。ケーシャブが誰か他の人のものであるのを恐れておられるかのように——。つまり、俗世間の人になつてしまふのを恐れるかのように！

彼を見つめながら、再び別な歌をうたわれた。

語るも恐ろし、語らぬも恐ろし

宝とも思ふ君を われ失いたくなし

わが心は君のもの 君にすべてを与えむ

危くも苦しきこの世の海を

渡して彼の岸に到る真言を

「わが心、君に捧げ、すべてを君にわたす。これぞ真言」つまり、すべてを捨てて至聖なるものに呼

びかけて、あの御方こそが真実で、ほかは皆、はかないものだ。あの御方を掴まなければすべてはムダだ！ これこそ大いなる真言マントウなのだ。

再びお坐りになって信者たちと話をされていた。この御方に水を差し上げるために、飲み水の用意がなされていた。

広間の一隅で、一人のブラフマ協会の会員がピアノを弾いていた。聖ラーマクリシュナは満面に笑みを浮かべて、子供のようにうれしそうにピアノの傍へ行ってお見物しておられた。少したってから、タクールは奥の間に案内されて行かれた。飲み物を召し上がるのだらう。それに、この家の婦人たちからごあいさつを受けられるのだらう。

タクール、聖ラーマクリシュナは飲み物に喉をうるおされた。こんどは馬車にお乗りになった。ブラフマ協会の会員たちは、一人のこらず馬車の傍に立ってお見送りする。馬車は睡蓮荘ドブキネーヨルから南神の寺院に向かって走り去った。